

## ■小学校編■

# 小学校歴史学習における価値判断授業の可能性 ～单元「世界に歩み出した日本」における価値判断授業の可能性～

習志野市立藤崎小学校教諭 ひえだ りゅうじ  
稗田 隆二



## 1 研究主題について

2030年の社会の在り方を見据え、新たな学習指導要領が本年3月31日に告示された。今回の改訂では、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶのか」の3つがキーワードとなり、改訂のポイントとして、①新しい時代に必要となる資質・能力（「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性等」）の育成、②新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた教科・科目の新設や見直し、③主体的・対話的で深い学びの視点からの学習過程の改善、④カリキュラム・マネジメントの確立となっている。

本研究では、第1時に「ノルマントン号事件（海難事故）」を契機にした不平等条約撤廃へ向けた国民の意識の高まりをもとに、本単元の学習の見通しをもたせるための討論を行う。さらに最終第7時では、今までの学習を踏まえた上で、児童が複数の事実を比較し関連付け総合して考え、歴史的事象について複眼的な見方をもち、歴史を体系的に捉えていけるような論題を設定し討論を行う。学習過程において事実や資料を根拠に多様な視点から課題を判断したり、自分と事象とのかかわりを深めたりする活動を通し、事象に対する「よい・悪い」「望ましい・望ましくない」「よりよい解決策は何か」等、社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連を考察する力、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想（選択・判断）する力の育成に取り組む。習得した社会認識を活用して価値分析を行う中で、「価値を判断する力＝価値判断」を高めていくことを目指す。

本研究では以下の内容を追究する。

- ① 価値判断をともなった、批判的吟味ができる効果的な論題、討論場面の設定

② 社会認識を深める工夫された単元構成

確かな社会認識を形成し主体的に問い続ける価値判断を伴う討論の学習を通して、現実の社会に見られる問題解決場面において必要な資質・能力の基礎を築くことを目指す。

## 2 研究目標

歴史的事象から得た社会認識をもとにした批判的吟味ができる討論の場面を設定することにより、確かな社会認識と価値判断の力が相互に高まることを明らかにする。

## 3 研究の実際

### (1)単元計画とその工夫

本単元では、概念探求型の過程をとり、知識を得る、思考を促す手立てを行った（表1）。具体的には、社会的事象についてのなぜという疑問、仮説、仮説の検証に必要な資料の収集と選択、更に仮説の検証を経てまとめに至る手順をとる。

表1 授業での手立て

|              |                                                                |
|--------------|----------------------------------------------------------------|
| 知識を得る<br>手立て | 各種資料（風刺画・地図や戦争の資料・グラフや表・写真や映像）<br>自分の考えを整理するワークシート、優れた感想や意見の紹介 |
| 思考を促す<br>手立て | ノルマントン号事件の討論学習（1時）、最終討論（7時）<br>風刺画を使って予想する学習、視点を示した学習感想、なぜ疑問   |

第1時ではノルマントン号事件の風刺画から疑問をもとに討論を組織し『あなたな

ら船長に対しどのような判決を下すか?』と問うた。重い刑にする判断の根拠は、現代の日本の現状をもとにした常識的な判断や死に対する感情的な判断である。一方、軽い刑にする根拠は、当時の国際的な日本の立場をもとに考えている。ただし、一貫して「酷い!」といった感情論等に終始することなく、「なぜ船長はこのような行動をとったのか」「この事件の何が問題なのか」について考えさせ、『日本はどのように諸外国と交渉していったのだろうか?そして、世界の中で日本の立場はどのように変わっていったのだろうか?』という単元を貫く学習問題を立てた。

第2～5時では第1時同様、授業冒頭にビゴの風刺画を用いて考えさせた。最初は自由に率直に画から感じることを予想させ、その後視点を絞り問う。第2時では、「なぜイギリスが日本を後押ししているのか?」、第3時では知っている事実から予想できること、わからないことを区別させ、年表を参考に「(描かれている)4人は誰がどの国か?」という追究の視点をもって考えていった。第5時では、これまで学習してきた内容をもとに疑問や新たに調べたい内容について一人調べを行った。

日清・日露戦争や韓国併合、条約改正、科学の発展、国民生活の様子等の事実を追究・考察した上で、最終の第7時では、前単元の内容を含めた歴史的事象を体系的にとらえていくことのできる討論の場面を設定した。授業の初発と最終に自分の論を割合で示し根拠をもとに判断を求めた。自分とは違う友達の考えを聞き、納得と反論を繰り返しながら「改革者がめざした姿」を考え、価値判断を行った。「我が国の国力が充実し国際的地位が向上した」ことを考察できる展開にした。

## (2) 論題の設定

既習事項が効果的に生かせること、構造的かつ総合的な歴史認識が得られ、民衆を

はじめ、いろいろな立場で考えながら、「国際的地位の向上が図られた」という本単元の中心概念を児童自身が実感することをねらいとした。それらを踏まえ、以下の論題を設定した。

【第7時の論題】明治維新の改革者から見て、この時の日本は彼らがめざした日本の姿にどのくらい近づいていたのだろうか。

明治政府の具体的な政策や改革者の思いや願い、世界とのかかわり、人々の生活等の事実を比較し関連付けて考えることにより、事実認識と価値認識を相互に発展させることができ、主体的な価値判断によって歴史を評価できる。さらに、各児童の判断の違いが明確になるように選択肢に割合を用いれば、授業の初発と最終の考えを比較することにより、数値に変化が見られたり、数値は同じでも判断の根拠がより具体的になったりするであろう。児童の価値判断の揺れを見取ることができると考えた。

## (3) 検証結果の分析と考察

### ① 批判的に吟味された価値判断

まず、下記アンケートの初回討論は前単元の「開国の是非」、最終討論は「明治の改革者からの評価」を比較し考察した(図1)。価値判断の重要な要素として、他者の価値観を認識し自己と異なる価値観に基づく評価によって自らの考えを再構築することである。

「友達の考えは自分の考えを深める参考

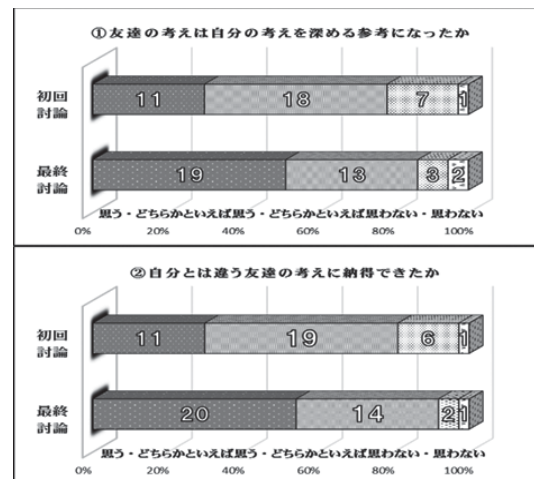


図1 初回と最終討論を比較した児童の変容

になったか」という問いに対し、最終討論では85%以上の児童(19名・13名)が、「自分とは違う考えに納得できたか」に対しては、90%以上の児童(20名・14名)が前2つの肯定的な群となった。児童は、討論の肝である他者の価値観を認め判断する良さを実感できたと評価することができる。

次に、児童の視点に着目すると2つの見方が存在した。まず、歴史的事実をもとに各政策を評価する。改革者の視点から国の成長度を評価しているのが達成度が比較的高い。一方、国民の生活や幸せに価値を見出し評価する。国は多くの国民によって成り立っているという視点から、当時の苦しく厳しい国民生活を評価しているのが達成度が低い傾向にある。論が変化した児童、論は変わらないが根拠が具体的になった児童等、本時初発の判断【上段】に比べ最終判断【下段】では多様な価値判断が含まれていた(表2)。最終的には、参加児童全員が持論を獲得した。

表2 最終討論の価値判断における児童の変容

|          |                                                                                                    |
|----------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| A児・戦争重要説 |                                                                                                    |
| 【初発】     | 不平等条約の改正をたんと進めている。ロシアのバルチック艦隊を破り、イギリスとの治外法権の撤廃にも成功し、世界に認められてきた。(80%)                               |
| 【最終】     | 強い国になるためには、戦争をして勝ち、たとえ反乱がおきても自分の領地(植民地)にしていかなければ強くなれないから悪くはない。ロシアに勝ち、当時世界最強と言われたイギリスと条約改正をした。(80%) |
| B児・政治主導説 |                                                                                                    |
| 【初発】     | 富国強兵で八幡製鉄所や富岡製糸場ができ、国が富んできた。強い兵をもちロシアにも勝った。人々(国民)がまとまっていない。混乱している。(65%)                            |
| 【最終】     | 100%にならない理由の多くは国民のことだった。確かに国民も大事だけど改革者は本当に国民のことを思っていたのか？富国強兵に国民のことは含まれていたのか？入っていない気がする。(70%)       |

## ②社会認識の変容

全7時間の学習を通し、児童のノートや学習感想に適切な事実認識や価値認識を含む説明の有無に着目し、知識と思考の量と質の面から変容を見取り、「(なぜ)疑問」は次時への追究につながると考え重視した(表3)。

表3 社会認識の児童の変容(%)

| レベル                             | 内 容(↓)                                  | 授業時数(→) | 1時   | 2時   | 3時   | 4時   | 5時   | 6時   | 7時   |
|---------------------------------|-----------------------------------------|---------|------|------|------|------|------|------|------|
| レベル3                            | 適切な事実認識や価値認識をもとに時代を体系的・具体的にとらえた説明       |         | 15   | 10   | 15   | 19   | 18   | 29   | 62   |
| レベル2                            | 適切な事実認識があり、論理的で整合性のある説明。「なぜ疑問」が具体的な説明   |         | 33   | 55   | 47   | 47   | 53   | 50   | 23   |
| レベル1                            | 事実認識はあるが、見方が一面的な説明。「なぜ疑問」がないか、または抽象的な説明 |         | 52   | 35   | 38   | 34   | 29   | 21   | 15   |
| 各時間の平均値<br>(レベル3を3点～レベル1を1点とする) |                                         |         | 1.63 | 1.74 | 1.76 | 1.84 | 1.88 | 2.08 | 2.41 |

第1時は全体的に数値が低い。これは既習事項や既有知識の少なさとノルマントン号事件を題材にした討論の中で、事件と領事裁判権の関係性に気付けても「許せない」という思いが先行したためである(レベル1が52%)。2時以降は、風刺画や各種資料から追究の視点にそって、事象に対する原因と結果、さらには考察や解釈ができるようになり、ノートやワークシートには、児童の問いが「どのように」から「なぜ」「どうして」へと変化していった。最終第7時では、事実認識と価値認識の構成要素が相互に関係し合い発展し、各児童の価値判断とともに確かな社会認識の育成が図られたと考える(レベル3・2が85%)。

## 4 研究のまとめ

### (1)成果

効果的な価値判断授業を行うためには、①確かな社会認識の獲得と主体的な価値判断場面が必須。②中心概念の獲得をめざし、自他の価値を認識できる論題・討論を設定する。以上により、社会認識と価値判断は密接に関係し、相乗効果により相互に高まっていく。

### (2)課題

社会認識を深め、批判的吟味ができる価値判断を行うためには、①知識を関係付け概念を獲得させるために「(なぜ)疑問」の問いを児童に明確にもたせたい。②発問、教材・史料の精選とその活用方法等を考え、単元計画をさらに工夫する必要があった。

● 小 学 校 編 ●

# 特別支援学級と交流学級の児童相互のコミュニケーション能力を育む支援の在り方

～特別支援学級・交流学級・学校全体の3つの基盤作りを通して～

香取市立佐原小学校教諭 <sup>ふくい ひろこ</sup> 福井 浩子



## 1 研究主題について

本県「学校教育指導の指針」説明資料の中に「学校教育は、障害のある子供の自立と社会参加を目指した取組を含め、『共生社会』の形成に向けて、重要な役割を果たすことが求められている。」と示されている。インクルーシブ教育システムの構築が推進される中、障害のある児童が障害のない児童と可能な限り、同じ場で学ぶことが今後目指すべき姿だと示されている。

私は知的障害特別支援学級の（以下知的学級）の担任をしていた。在籍児童は、国語科、算数科のみ知的学級で学習し、他はすべて交流学級で過ごしていた。知的学級では積極的に話をする事ができ、分からないことや困っていることに対しても、自分から助けを求めることができる。しかし、交流学級では、周りの友達にはできているものが、自分だけ分かっていないという様子が見られた。他にも、交流学級児童から声をかけられても、質問に応じて返答をするのは難しい様子が見てとれた。交流学級で1日の多くの時間をこのような状態で過ごしていて、コミュニケーションの図り方や自分の思いを相手に伝えることを困難としている様子が見られるという実態から、この児童には、コミュニケーション能力を育むための経験と学習が特に大切ではないかと考えた。けれども、1日に1、2時間の国語科や算数科の授業の中だけで、コミュニケーション能力をどのように育むことができるのか、また、知的学級の授業だけで

身に付けることはできるのかという課題が出てきた。

そこで、知的学級と交流学級の児童相互のコミュニケーション能力を育んでいくためには、知的学級児童と交流学級児童とが同じ場で学ぶだけではなく、知的学級児童が持っている能力を最大限に伸ばすことのできる交流及び共同学習にするために、特別支援学級、交流学級、そして学校全体の3つの場でそれぞれかかわりを深められるような基盤作りが必要なのではないかと考え、本主題を設定した。

## 2 研究目標・研究の視点

知的障害のある児童が自信をもち、交流学級児童相互のコミュニケーションを育むために知的学級、交流学級、学校全体のそれぞれの場での基盤作りの方法について探る。

## 3 研究の実際

### (1)研究仮説

- ①知的学級児童と学校全体の教職員や交流学級児童がかかわる場面を設定し、知的学級児童が交流学級児童とのコミュニケーション能力を育むことができるような基盤を作ることで、知的学級児童と交流学級児童とのコミュニケーションが図りやすくなるであろう。
- ②知的学級児童のできることを増やし、自信をもたせていくことで、交流学級児童とのコミュニケーションが図りやすくな

るであろう。

## (2)研究の具体的内容

### ①検証授業について

検証授業の前に調査研究を行い、知的学級児童に必要なことは「自己理解・他者理解」「コミュニケーションを育むこと」「自信をもって生活をする」とであることが明らかとなった。この結果から、授業の中に「自己理解・他者理解」「コミュニケーション」「児童に自信をもたせる」要素を取り入れた指導や支援を行うこととした。特に、「自己理解・他者理解」の目的からは、道德の授業が有効ではないかと考えた。しかし、対象児童は国語科と算数科のみ知的学級で学習をしていることから、国語科と道德を関連させ、自立活動の視点を取り入れた授業を計画した。その後、交流及び共同学習として交流学級での道德の授業へとつなげていくようにした。

### ②授業計画

#### (ア) 単元計画

表1 単元計画

| 単元名「伝えよう私のよいところ・みんなのよいところ」(8時間扱い) |             |            |                           |         |
|-----------------------------------|-------------|------------|---------------------------|---------|
| 時間                                | 学習教科        | 学習場所       | 学習内容                      | ポイント    |
| 1                                 | 国語(道德・自立活動) | 知的学級       | 読み聞かせ、「よいところ」「気になるところ」とは? | A・B・C   |
| 2                                 | 国語(道德・自立活動) | 知的学級       | 自分の「よいところ」「気になるところ」探し     | A・B・D   |
| 3                                 | 国語(道德・自立活動) | 知的学級       | 自分のことを相手に伝える練習            | A・B     |
| 4                                 | 国語(道德・自立活動) | 知的学級       | 自分のことを相手に伝える練習            | A・B・D   |
| 5                                 | 道德(自立活動)    | 交流学級(5年教室) | 「わたしカード」作り・グループエンカウンター    | A・D・E   |
| 6                                 | 道德(自立活動)    | 交流学級(5年教室) | 友達の「よいところ」探し              | A・D・E   |
| 7                                 | 道德(自立活動)    | 交流学級(5年教室) | グループエンカウンター               | A・B・D・E |
| 8                                 | 国語(道德・自立活動) | 知的学級       | ふりかえり                     | A・B     |

#### (イ) 授業のポイント (表1)

##### a コミュニケーションを図るための手立て

○話す不安を軽減させるために、初めは仲の良い友達や、話しやすい先生から話すようにする。その後、話す機会を多くするために、教職員や交流学級児童と話す機会を設け、話すことへの不安の除去、楽しさ、自信へとつなげていく。(A)

○困った時に相手に尋ねることができるよう

に、どのように相手に伝えればよいか、状況に応じた尋ね方を伝え、練習する。(B)

##### b 自己理解、他者理解のための手立て

○自分の長所・短所を見つけられるように絵本『ぼくだけのこと』『ええところ』を活用して、自分の特徴と照らし合わせながら探せるようにする。(C)

○自分の知らない長所に気付くことができるように、知的学級の友達、交流学級児童や教職員からも児童の良いところを教えてもらうようにする。(D)

○児童が自己理解や他者理解ができるような話しやすい環境を作るために、グループエンカウンターを取り入れた活動を行う。(E)

##### c その他の手立て

自分の良いところを書いた付箋を貼るワークシートを用意した。自分の良いところは、いくつあるのかを知的学級児童が自分自身で見てすぐに分かるようにした。また、分からないときに友達に尋ねることができるように相手への尋ね方のカードも用意した。

### ③内容と結果

#### (ア) 教職員とのかかわり

教職員と話すことをきっかけに、話すことへの不安の除去、話せたことで自信につなげることを目的とし、教職員とかかわりをもつ授業を最初に行うことにした。3時間目に教室で練習をした後、4時間目に実際に教職員と話をした。3時間目は緊張があり、参観していた担任以外の教職員やゲストに対しても不安な表情を見せ、時間内に会話をすることができなかった。しかし、4時間目は①児童自身が話しやすい教職員を選んだこと②事前に友達と練習を重ねたこと③前時の授業終了後にゲストに自分から話しかけ、自己紹介をすることができたという成功体験をしたこと④教職員からの励ましの言葉をもらったことで、不安な表

情を見せることなく、発言も自分から発言することが多いなど、積極的に参加する姿を見ることができた。今まで話したこともない教職員から励ましの言葉をもらったことで、児童が張り切って活動している様子が見られたことから、意図的に教職員とかかわりをもつ場面を作ったことは有効であったと考えた。

#### (1) 交流学級児童とのかかわり

5時間目は、交流及び共同学習で、交流学級と知的学級で授業を行った。交流学級では、不安な表情を見せることもあったが、活動の場面で知的学級に移動し、12人程度のグループで活動することが分かったと、堂々とした表情と大きな声で友達の前でルールの説明をし、そこで友達から拍手をもらったことで、その後の活動も積極的に手を挙げたり、友達に話しかけたりとたくさんのかかわりをもつことができた。6時間目は、交流学級で友達の良いところを付箋に書いて渡すという活動を行った。ここでは、事前に活動内容を知らずに交流学級での活動が始まったため、児童の表情に不安の様子が見られた。そこで、知的学級の担任が入り、児童と一緒に書くことで不安も減り、友達の良いところを探し、慣れてきたころには、笑顔で渡すことができるようになっていた。7時間目に関しても交流学級で、事前練習なしでの活動だったが、初めは不安な表情を見せていたものの、時間が経つにつれ、おおむね自分の伝えたいことを相手に伝えることができていた。

#### ④考察

検証授業の結果から、知的学級児童にとって、交流学級児童とのコミュニケーションを育むためには、交流及び共同学習で行うことを事前に練習したり、見通しを持って授業に参加したりするなど、段階を踏んだ指導が必要であることが確かめられた。そのためには、まず、教職員とのかか

わりを常にもっておくことで、児童にとっては不安が軽減され、更に教職員や交流学級児童との自己理解、他者理解をしたうえでのかかわりが有効であることが分かった。今回、児童が交流学級児童とやりとりができたのは、国語科と道德の授業を通して、コミュニケーションの取り方だけではなく、知的学級児童の良いところを交流学級児童や教職員から教えてもらったことで自信につながり、児童相互のコミュニケーション能力を育むことができたからではないかと感じた。交流学級の児童にとっても、普段あまり話をしない知的学級児童から良いところを見つけてもらったことや、堂々とした態度で発表している知的学級児童の姿を見ることで、より関係が深まったと考ええる。

## 4 成果と課題

教職員や交流学級児童との授業を行う際、事前の練習を行うなど段階を踏んだり、知的学級児童が交流学級で活躍できるような場の工夫をした授業を取り入れたりしたことで、児童の心理的な安定と自信につながり、そこから児童相互のコミュニケーションがより円滑に図ることができるようになった。一方で、今回の取組だけで、知的学級児童があらゆる場面で問題なく交流学級児童とのかかわりができるようになったということではない。知的学級児童がただ座っているだけではなく、実質的に参加が図られている授業となるように継続的に交流学級の担任との連携を密に図ること、年間を通して教職員や交流学級児童とのかかわりを継続することが必要である。

#### 【参考文献】

○くすのきしげのり『ええところ』

学研プラス 2012 年

○森絵都『ぼくだけのこと』偕成社 2013 年

小 学 校 編

# 日本の伝統音楽に親しませるための題材開発の試み

～小・中学校の学びの連続性を意識した箏の指導を通して～

富山学園南房総市立富山小学校教諭 <sup>たかなし</sup> 高梨ひとみ



## 1 研究主題について

社会が目まぐるしく変化するとともに音楽も多種多様なものとなり、和楽器や伝統芸能についてよく知らない児童生徒が増えてきているのが現状である。

そこで、本研究では日本の伝統音楽のよさに気づき、身近な音楽として親しむことができるようにするために、箏を取り扱った指導を実践していく。その際、中期学年（小学校5年生～中学校1年生）に焦点を当て、「学びの連続性」を意識した題材開発を行う。小中連携や小中一貫教育が進む中、小学校6年生と中学1年生の間に生まれる段差をなくし「なめらかな接続」をしていくという側面からも、中期学年の題材開発は非常に重要な役目を担っていると考える。日本の伝統音楽も、小・中学校における「学びの連続性」を確立し、繰り返し学ぶ中でじっくりと力をつけられるようにしていけば、児童生徒の日本の伝統音楽に対する興味関心が高まり、身近な音楽として親しむことができるのではないかと考え、本主題を設定した。

## 2 研究目標

小・中学校の学びの連続性を意識した箏の指導を通して、日本の伝統音楽に親しませるための題材の開発と指導法の有効性を明らかにする。

## 3 研究の実際

箏の指導において、以下の2点に着目した指導を行えば、日本の伝統音楽のよさに気づき、身近な音楽として親しむことがで

きるだろう。

- (1)表現と鑑賞を関連させた題材の学習過程の工夫
- (2)中期学年における学びの連続性を意識した段階的・発展的な指導

## 4 題材の開発

表現と鑑賞は表裏一体の関係にあり、それらを繰り返し学習していくことにより、音楽活動そのものを楽しんだり、音楽に感動したりする経験が積み重なり、豊かな情操をはぐくむことにつながっていく。そこで、日本の伝統音楽に親しませるために横（同一学年内での表現と鑑賞の関連、図1）と縦（小・中の学びの連続性、図2）のつながりを意識した題材を開発した。

（7年生＝中学校1年生）

|    |              |               |                |             |
|----|--------------|---------------|----------------|-------------|
| 7年 | 鑑賞<br>「六段の調」 | 歌唱<br>唱歌      | 器楽<br>奏法       | 鑑賞<br>アジアの箏 |
| 6年 | 国語<br>「枕草子」  | 鑑賞<br>「星に願いを」 | 音楽づくり<br>「枕草子」 | 鑑賞<br>「枕草子」 |
| 5年 | 鑑賞<br>「春の海」  | 器楽<br>「虫づくし」  | 器楽<br>「さくら」    | 鑑賞<br>「春の海」 |

図1 同一学年内での表現と鑑賞の関連

図1は、各学年の活動をまとめたものである。同一学年の中で、箏を中心とした表現と鑑賞を取り入れ、和楽器そのものに親しむようにする。この時、鑑賞を先に実施し、「楽器を弾いてみたい」という興味関心を高める。次に、実際に箏を弾く体験から自国の伝統楽器の音色に浸ると同時に演

奏する面白さを味わわせ、箏が身近な楽器であることを実感させていく。また、7年生の活動では、鑑賞曲の冒頭部分を実際に唱歌でうたったり、箏で弾いたりする活動を取り入れ、楽曲への理解を深めるようにする。

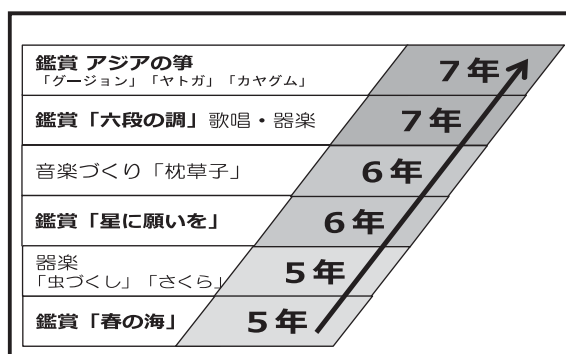


図2 小・中の学びの連続性

図2は、小中の学びの連続性から考えた系統図である。学年の発達段階に応じた教材を用い、5年生から7年生まで、段階的・発展的な活動を行う。5年生では、箏の扱い方と基本的な弾き方を学習する。4年生からのつながりを意識し日本古謡「さくら」を用い、箏の音色と情景を結びつけながら箏を弾く面白さを味わわせていく。6年生では、5年生での基本的な学習をもとに箏から溢れ出る日本らしさを存分に楽しむ。さらに、国語科の古典と関連させ他教科との関連ももたせる。音楽づくりでは児童の自由な発想を生かすようにし、箏に対する愛着を深めるようにしていく。7年生では、唱歌を取り入れ楽器の演奏と言葉が深くかわっていることや、奏法から生み出される表現力の豊かさにせまっていく。そして、日本の箏についての理解をさらに深めるためにアジア圏の箏の映像を用いて比較鑑賞をする。

## 5 検証授業の実際

児童生徒が日本の伝統音楽に親しみ、意欲をもって活動するために、図3のように学習過程を設定した。

|    | 見出す                     | 調べる                       | 深める                      | まとめあげる       |
|----|-------------------------|---------------------------|--------------------------|--------------|
| 7年 | 「六段の調」<br>音高            | 唱歌・奏法<br>音高<br>序破急        | 比較鑑賞<br>アジアの箏<br>音色・奏法   | 箏の魅力新聞       |
| 6年 | 「枕草子」<br>「星に願いを」<br>弾き方 | 音の探求                      | 音楽づくり<br>話し合い            | 発表<br>箏の魅力新聞 |
| 5年 | 「春の海」<br>音色<br>〔共通事項〕   | 箏の特徴<br>基本的な弾き方<br>「虫づくし」 | 比較鑑賞<br>「春の海」<br>器楽「さくら」 | 箏の魅力新聞       |

図3 学習過程

### 【5年：4時間】

和楽器との出会いを大切にし、「春の海」の鑑賞、箏の取り扱い方、演奏体験、西洋の楽器との比較鑑賞を行った。

「春の海」の鑑賞では、箏と尺八の音色を聴き取らせると同時に、〔共通事項〕とイメージを結びつけ、そこから生まれる曲の面白さや音色の美しさを味わうようにした。聴き取ったことや感想を伝え合い共感し合ったり、自分とは異なる視点から曲を味わったりすることで、曲への理解をさらに深めることにつながった。体験活動では、弦を順番に弾くことで一つの曲となる「虫づくし」と日本古謡「さくら」の2曲に取り組んだ。この時間は、ゲストティーチャーを活用することにより、一音一音しっかりと響くように弾くことや、習熟に応じた学習（基本の旋律からアレンジへ）が可能となり、箏の美しい音色に親しみをもつと同時に、和楽器が弾けたという喜びを存分に味わうことができた。

比較鑑賞では、ハープとフルートで演奏された「春の海」を鑑賞した。音色の特徴に気付いたり、それぞれの楽器が生み出す曲の雰囲気の違いを感じたりすることができた。

### 【6年：5時間】

箏の豊かな表現力を実際に体験するために、音楽づくりを中心に授業を展開した。他教科との関連を図り、国語科の授業で児童が書いたオリジナルの「枕草子」を活用

した。

始めに、和の音色と洋の旋律が美しく織り成す「星に願いを」を聴き、演奏の仕方を参考にさせてから音の探求を行った。「星に願いを」を聴く中で、表現とイメージを結び付けたり、トレモロなどの弾き方に興味を示したりすることができた。

音の探求活動や音楽づくりは、互いのアイデアを生かした音楽づくりを行うためにペアで活動を行った。児童は意見を出し合いながら、柱の数や位置を工夫したり、紙や布を置いて音を変化させたりするなど、様々な角度から音の出し方を考え、思考錯誤しながら表現したい音に近づけていった。

音から音楽へと構成する場面では、〔共通事項〕を手がかりに強弱や速度、問いと答えなどを意識し、創意工夫しながら活動することができた。また、新しい弾き方や悩みをクラス全体で共有・解決し活動が円滑に進められるようにしたことで、独創的な表現が可能となった。さらに、対話を大切にした活動を取り入れることにより、拍を数え変わるタイミングを相手に合図したり、互いに目を合わせたり、呼吸を合わせたりするなど、相手を意識してよりよい演奏を目指す姿が見られた。

発表会では、「枕草子」を朗読した後に、音楽づくりで工夫したところや特に聴いて欲しいところを伝えてから曲を披露した。「聴く視点」が明確になり、箏の音色の変化や、そこから生まれる表現の面白さを味わうことができた。

#### 【7年：2時間】

1単位時間の中で鑑賞と表現に関連させた授業を行い、鑑賞曲「六段の調」への理解を深めるようにした。さらに、アジアの箏の映像資料を用いて比較鑑賞をし、箏の音色や奏法の違いにも気付かせるようにした。

「六段の調」は、箏曲を身近に感じるため

にゲストティーチャーによる生演奏を鑑賞した。続いて、唱歌をうたい、日本の伝統音楽と言葉が密接にかかわっていることに気付かせると共に、リズムや速度、音高などを意識しながらうたうようにした。箏を弾くときに、唱歌をうたいながら弾く生徒が多く、唱歌と奏法が深く結びついていることを体験を通じて学ぶことができた。また、生徒自ら冒頭部分を弾くことにより奏法による音高の違いをはっきりと感じ取ることができた。

「六段の調」の序破急による速度の違いを感じ取らせる場面では、初段の後に四段、五段、六段を鑑賞した。段を飛ばして聴くことにより速度の違いをしっかりと認識することができ、緩急の変化が生み出す音楽の表情を感じ取ることができた。

最後にアジアの箏の演奏を視聴し、楽器そのものの違いや奏法の違い、音色や曲想の違いを味わい和楽器への興味関心を高めた。

## 6 研究のまとめ

### (1)成果

鑑賞曲から「弾いてみたい」という意欲をかき立て、学年を追うごとに発展的・段階的な活動を取り入れたことが、箏への興味関心を高めたり理解を深めたりすることにつながった。また、箏を身近な楽器として感じることで、他の伝統音楽にも興味をもつことができた。

### (2)課題

今後、小中連携が進む中で、学年を越えた交流が求められる。小学生と中学生が同じ目的に向かってつくりあげる活動や、中学生が小学生に教える場面を取り入れるなど、小中連携を意識した実践を重ねていく必要がある。